

授業内での話し合い活動が学習意欲に及ぼす影響

—高校生を対象とした動機づけ理論からの検討—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 萩原佳蓮

1. はじめに

2019 年末から新型コロナウイルスの感染拡大により、大学等でも 95.4%が遠隔・オンライン授業を受講するようになった(2021, 総務省)。私自身、大学3年生からオンライン授業に変更となり、授業によっては完全オンライン授業だったことで大学へ足を運ばない日が増えたことをよく覚えている。同じようにオンライン授業を受けている学生のなかで授業に満足している学生は 56.9%と半数をкаろうじて超えている(2021, 文部科学省)ものの、実感としては対面授業よりもわかりづらく、本当に理解できているのだろうかと感じることも多かった。また、理解できている感覚、能動的に取り組んでいる感覚が薄いことで学習意欲が低下し、それに伴って成績も低下し、成績が下がったことでより学習意欲が低下するというループに陥っていた。大学生の私ですらそう思ったのだから、高校生ならより感じたのではないか。

実際には高校生の学習意欲はどのように変動していたのだろうか。コロナ禍による影響として、2019年から2021年の3年間で比較した調査結果(2022, 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所)によると、勉強しようという気持ちがわからないと答えた高校生は 61.3%と2019年と比較して 6.7%増加した。学年別でみると高校1年生で増加幅が大きい傾向にあった。3年間で学習意欲が低下した小中高校生の割合は 25.8%と、向上した児童生徒の2倍以上差をつける形となった。学習意欲が低下している児童生徒たちで、「上手な勉強の仕方がわからない」と答えた児童生徒が 47.9%、「授業が楽しくなくなってしまった」が 32.4%とオンライン授業や急激な GIGA スクール構

想の拡大、対人のコミュニケーション不足による居場所感の無さや自信の無さ、対人の活動への苦手感等が理由と考えられる。

そこで、学習意欲が低下している高校生たちが学習意欲を向上させることができるような授業とはどんなものか検討したいと考える。

2. 問題

(1) 話し合い活動

文部科学省(2021)は、子供たちに育むべき資質・能力として「一人ひとりの児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」とし、この実現のためには、協働的な学びと個別最適な学びの両方が一体的に充実されていることが重要であるとされている。協働的な学びとは、様々な他者と協働し、異なる考えを組み合わせることでより良い学びを生み出すことが目的とされている。また、個別最適な学びとは子どもたちが自己調整しながら学習を進めていくイメージであり、能動的に自分の学びをコントロールしていくことが大切になる。自己調整を行う学び(自己調整学習)とは、予見・遂行・自己内省という3つの段階があるというが、自律的に学ぶにはまず学ぼうとする気持ち、学習の動機づけからなる学習意欲が重要になる。こうした学びを実現するために、私は話し合い活動が最適ではないかと考える。

(2) 学習意欲

鹿毛(2013)によると、学習意欲とは「学ば

うとする心理現象」の総称とされ、様々な体験から一人ひとりに形成される信念や態度の反映で、知的技能としての学習方略に規定されるという。また、学びたい欲求とその学習に関連する諸活動を成し遂げようとする意志の複合的心理状態とも定義しており、動機づけと非常に関連が深い。また、桜井(2002)によると学習意欲の定義は明確にないが強いて言うなら学習への動機づけであるとし、内容を「常により高い目標に向かって努力する向上心」「集団に所属し他人から認められたいという社会的・人格的欲求」「ねばり強く最後までやり抜く固執性(持続性)」「他の欲求を抑えて我慢する忍耐力」「人に言われなくても自分から進んでやる自発性」「人に頼らず自分のことは自分で解決する自主性」と挙げている。この桜井が指導・助言を行って作成された栃木県教育総合センターの「学ぶ意欲をはぐくむー「学習に関するアンケート」を活用してー」リーフレットには、「学習者が意思をもって、自発的に学習活動を求めようとする心の働き」と定義している。本研究では、学習意欲を教育現場に即した栃木県教育総合センター(2009)の定義を用いることとする。学習意欲にはプロセスがあり(Figure1)、このプロセスが循環することで内発的動機づけが強まって自己調整的な学習が可能となる。



Figure1 学習意欲のプロセス (2009, 栃木県総合教育センター)

(3) ARCS モデル

本研究では、心理学等の専門家でなくても教育現場で活用でき、学習実行環境の診断の基礎に活用することでどこに問題点があるのか分析・評価するために ARCS モデルを指針として用いることとする。これは、教材設計の際に動機づけに基づいて構想するため Keller によって提唱されたモデルであり、4つの要因とその下位分類からなる (Table1)。

Table1 ARCS モデル (Keller,1984 に基づく)

Attention	A-1	知覚的喚起
注意	A-2	探求心の喚起
	A-3	変化性
	Relevance	R-1
関連性	R-2	目標指向性
	R-3	動機的一致
	Confidence	C-1
自信	C-2	成功の機会
	C-3	コントロールの個人化
	Satisfaction	S-1
満足感	S-2	肯定的な結果
	S-3	公平さ

定義として、Attention は「学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する。」、Relevance は「学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たす。」、Confidence は「学習者が成功できることを確信・実感するための助けとする。」、Satisfaction は「内的/外的に報酬によって達成を強化する。」とされている (Keller,2010)。本モデルは高等教育での実践例が多く見られるが、中等教育ではまだ実践例が少ないので、その有効性についても併せて検証することにしたい。

3. 目的

ARCS モデルに基づいて構築された地理の授業において、話し合い活動を取り入れることで学習意欲にどのような影響があるのかを検

討する。

4. 方法

A 市立 B 高等学校 2 学年地理 B 選択クラスに研究協力を依頼し、協力に応じた約 32 名に質問紙調査を行った。学習意欲の変化を見るために、研究開始前（2022 年 12 月 7 日）、1 回目研究授業（2022 年 12 月 20 日）前後、2 回目研究授業（2023 年 1 月 17 日）前後の計 5 回、同一の質問紙で調査を実施した。アンケートに倫理的配慮について記載し、協力したくない生徒については無回答で良いとした。

(1) 学習意欲

栃木県総合教育センター（2009）による「学習に関するアンケート」の全 28 項目で構成されている。学習意欲の各構成要素の解説は Table2 のようになっている。

(2) フェイス項目

クラス・出席番号、文理選択、進学方法（中高一貫校であるため、内部進学か外部からの進学か）の 3 項目を尋ねた。

Table2 学習意欲各要素解説（2009，栃木県総合教育センター）

レベル	構成要素	解説
認知・感情	おもしろさ・楽しさ	結果に依存しない感情で、失敗したとしても感じる事ができ、知的好奇心が活性化されていれば得られる感情。
	有能感	学習行動がうまくいったとき、成功したときに感じる事が多い感情。ほめられることにより、高まることある。
	充実感	向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じる事ができる感情。
学習行動	情報収集	主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動。
	自発学習	自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習をしたりする行動。
	挑戦行動	今よりも少し難しい問題に挑戦する行動。
	深い思考	問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動。

	独立達成	できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動。
	協同学習	友達と協力して問題を解決する行動。
欲求・動機	知的好奇心	未知のことや珍しいことに興味・関心をもち、それらを探求したいという欲求。
	有能さへの欲求	より有能になりたい、より賢くなりたいという欲求。
	向社会的欲求	社会や人のためになりたいという欲求。思いやりの気持ちとも関連する。

5. 実践

日本の高校生は国際的に比較して社会参画意識が低い（2019，内閣府）とされている。自国の政治への関心が低く、社会問題について話し合ったり解決に向けて関与しようとしたりする姿勢があまり見られないこともこれを裏付けている。「高等学校学習指導要領解説（地理歴史編）」（2009，文部科学省）の「(2) 現代世界の系統地理的考察」に「世界の自然環境、資源、産業、人口、都市・集落、生活文化、民族・宗教に関する諸事象の空間的な規則性、傾向性やそれらの要因などを系統地理的に考察させるとともに、現代世界の諸課題について地球的視野から理解させる。」とあることを踏まえ、現代課題に対して将来の社会の形成者として他者と解決に向けて協働し合う、またその力を育成することを本研究での 2 つの研究授業の共通目標とする。Table3 を参考に指導案を作成した。

Table3 ARCS モデル作業質問（Keller,2010）

要因	作業質問
Attention	どのようにしたらこの学習体験を刺激的で面白くすることができるだろうか。
Relevance	どんなやり方で、この学習体験を学習者にとって意義深いものにさせることができるだろうか。
Confidence	どのようにしたら学習者が成功するのを助けたり、自分たちの成功に向けて工夫するための手がかりを盛り込めるだろうか。

Satisfaction	学習者がこの経験に満足し、さらに学び続けたい気持ちになるには何をしたらよいか。
--------------	---

(1) 研究授業 1 時間目

本授業では、「エネルギー問題」について話し合い、解決策を検討することを目的としている。導入で、ここ最近どうして節電が奨励されているのかを考えさせた。その後日本での各種発電方法の割合、昨今のエネルギー不足等を口頭で紹介した上で、今後日本はどのようなエネルギー政策をするべきか各個人で考えさせ、全体で数人が発表する。その後発表された意見を基に各国のエネルギー政策事情や打開策として日本で言われている例等を知識として踏まえた上で4~6人のグループで各自が考えた政策を持ち寄って話し合いを行い、各班で1つずつ政策をまとめて提言、クラスで採択する政策を投票するという授業構成にした。本授業は教育実習生という外部要因の影響を排除するために、普段から地理 B の授業を担当している先生 C に授業構想を伝え、ワークシートを用意して渡した上で授業を行ってもらった。

(2) 研究授業 2 時間目

本授業では、「環境問題」について話し合い、解決策を検討することを目的としている。導入で、若者に人気の有名コーヒーチェーン店の人気メニューを予想し、使われているコーヒーや紅茶が一体どこで生産されているのか地図に色を付ける形で確認する。その後、コーヒーチェーン店や競合他社等の環境問題に対する取り組みを紹介した上で、あなたがコーヒーチェーン店の店長だったらどんな環境問題への取り組みを行いますかという問いを各自で考える。その後4~6人程度の班ごとに集まって意見交流し、数名を一時的にトレードして隣の班で話題になっていたことを自分の班へ持ち帰るジグソー法を用いた活動を行った。

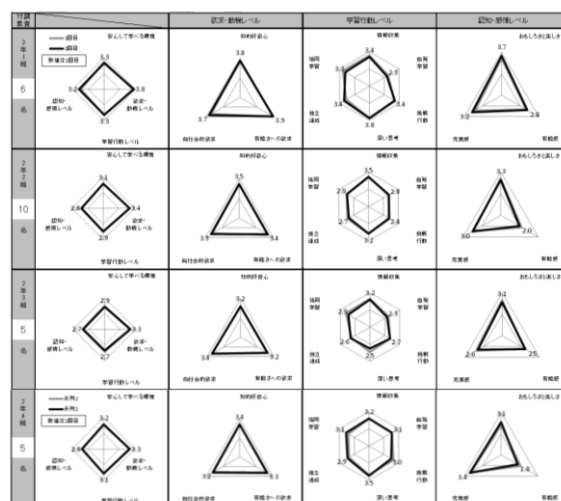
本授業は前回の研究授業終了後に自己紹介や質疑応答等教育実習生と交流する時間とっていただいたので、私自身が実践を行った。

6. 結果

(1) 研究授業 1 時間目

研究授業 1 時間目の授業前後の学習に関するアンケート結果 (Table4) は、どのクラスにおいても全体としては大きな差が出なかったが、1組では「独立達成」(できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動) で数値が向上したものの「協同学習」(友達と協力して問題を解決する行動) で数値が低下し、3組は「協同学習」と「深い思考」(問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を複数考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動) において数値が低下した。2組は特に大きな変化は見られなかったが、4組では「協同学習」で数値が向上した一方で挑戦行動と有能感が低下した。

Table4 研究授業 1 時間目授業前後比較

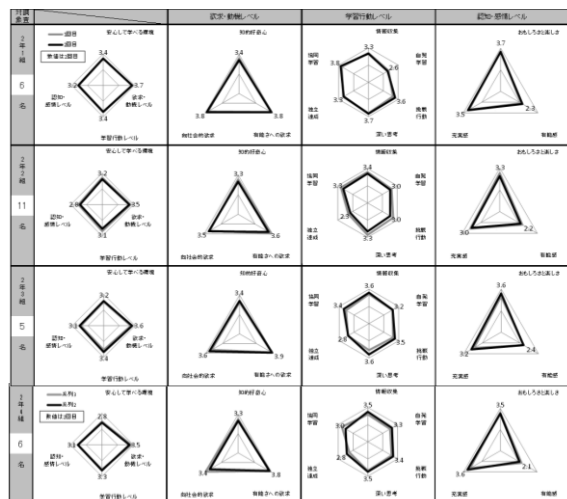


(2) 研究授業 2 時間目

研究授業 2 時間目の授業前後の学習に関するアンケートでは (Table5), 学習行動レベルにおいて2組と4組では低下し、3組では向上した。1組では特に「挑戦行動」(今よりも少し難しい問題に挑戦する行動) において向上が見られた一方で、2組では欲求・動機レベルで「有能さへの欲求」(より有能になりたい, より賢くなりたいという欲求) が低下し、学習行動レベルにおいて全体的に授業前よりも低下した。3組では「協同学習」と「深い思考」において大

きな伸びが見られた。4組では欲求・動機レベルで「向社会的欲求」(社会や人のためになりたいという欲求や思いやりの気持ち)が目に見えて低下した。また、学習行動レベルでは「協同学習」が大きく低下し、「深い思考」以外の値は向上した。

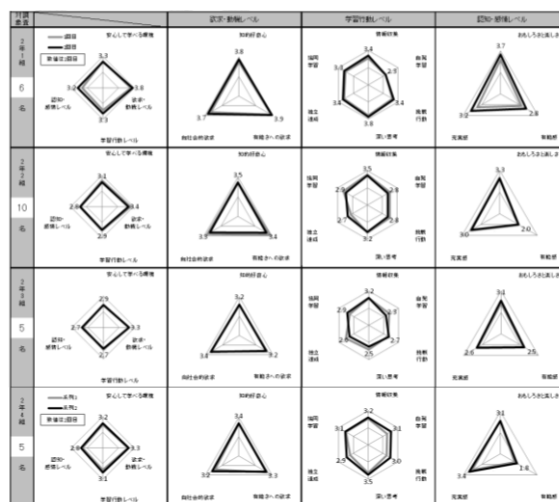
Table5 研究授業2時間目授業前後比較



(3)研究前と1時間目の研究授業後

まず、欲求・動機レベルで見ると、1組は全体的に向上、2組では全体的に低下、3組では変化なし、4組では「向社会的欲求」について向上した。次に学習行動レベルで見ると、1組は「情報収集」(主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動)が向上、2組では「独立達成」が目に見えて向上した一方で情報収集以外は低下した。3組は「情報収集」と「挑戦行動」に変化なし、「協同学習」で向上、それ以外は低下した。4組では「情報収集」、「協同学習」、「深い思考」の3つが変化がなかった一方でその他は向上し、特に「自発学習」(自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習したりする行動)と「挑戦行動」では大きく向上した。認知・感情レベルで見ると、1組では全ての値が向上したが、他のクラスではほぼ変化がなかった (Table6)。

Table6 研究前と1時間目研究授業後比較



(4)研究を通しての変化

研究前と2時間目の研究授業のアンケート結果を比較する (Table7)。全体として2組以外では差の大小はあるが、値が向上した。欲求・動機レベルで見ると、1組では「向社会的欲求」が向上し、2組では「有能さへの欲求」が若干低下した。3組では全体的に向上したが特に「有能さへの欲求」が向上している。4組では特に「向社会的欲求」が向上した。次に学習行動レベルで見ると、1組では特に「協同学習」が大きく向上していた。2組ではどの値も変化が見られなかった。3組では、「独立達成」以外は全体的に大きく向上した。4組では、「協同学習」と「深い思考」についてはほぼ変化がなかったが、特に「挑戦行動」で大きく向上した。認知・感情レベルで見ると、1組では特に「充実感」

(向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じることができ感情)が大きく向上した一方で、2組はほとんど変化がなかった。3組では、「有能感」(学習がうまくいったとき、成功したときに感じる人が多い感情)以外は大きく向上した。4組では全体的に向上したが、特に「有能感」で伸びが見られた。

学年全体で見ると (Table8)、欲求・動機レベルでは大きな変化が見られなかったが、学習行動、認知・感情レベルで向上が見られた結果となった。

Table7 研究前後比較 (クラス別)

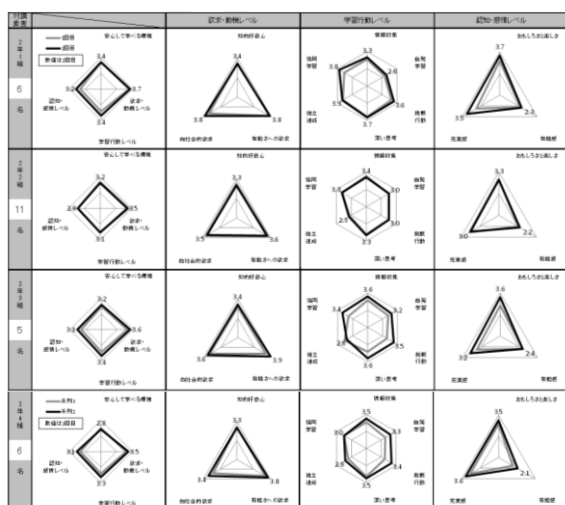
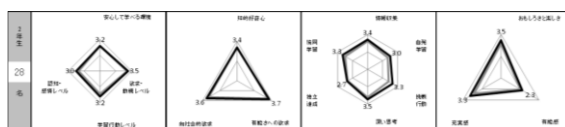


Table8 研究前後比較 (学年全体)



研究を通して、認知・感情レベル・学習行動レベルで数値が向上した。また、レベルごとに見ると、まず欲求・動機レベルではほとんど変動が無かった。続いて学習行動レベルでは、「独立達成」以外は全て数値が向上したが、特に伸びが良かったのは「挑戦行動」だった。続いて認知・感情レベルでも全ての数値が向上した。特に伸びが良かったのは「充実感」だった。安心して学べる環境については、ほぼ一定の環境（座席やクラス、教室に変更なし）で実施したことで値に変動はなかった。

7. 考察

1時間目の研究授業前後の学習意欲のアンケート結果から、クラスごとに数値が向上・低下した要素にばらつきはあるが、学年全体で見て「協同学習」が低下傾向のあった理由として、生徒たち自身がもう既に環境問題とその対策について知識があり、他者と交流する前に生徒たちの中に自分なりの解答があったことで、オープンエンドクエスチョンとして十分に機能しなかったこと等が考えられる。また、「有能感」が一部クラスで低下したのは、授業の構成

やワークシート等に工夫が足りず、達成感やうまくいっている感覚が得にくい授業となってしまっていたからではないかと考える。この反省を活かして、2時間目の授業の構想を修正した。

2時間目の研究授業前後の学習意欲のアンケート結果から、全体的に学習行動の値が向上したのは、各クラスに差はあるものの、生徒たちの「充実感」が向上していることから予想するに、実際にある企業を基に考えたことで社会について考えることができ、「深い思考」や「挑戦行動」に影響を及ぼしたのではないかと考える。一方で低下したクラス、値も多かった。授業後の感想から面白かった、楽しかったという肯定的な声はよく聞かれたが、数値に影響するような効果を生み出す授業にはならなかったのかもしれない。また、生徒によっては環境問題とはそもそもどんなものなのか復習する必要があり、話し合いの前提となる知識が不足したことで話し合いについていくことが出来ず、意欲が向上しなかったのかもしれない。

学習意欲のアンケート結果から、研究を通して見比べると欲求・動機レベルに変動がなかったが、研究授業ごとに見ると「有能さへの欲求」と「向社会的欲求」が向上しているクラスもあった。このことから、2回の授業だけでは大きく考え方を考えることは出来なかったが、1つひとつの授業ではより学びたいという学習意欲が向上することもあり、時間をかけて徐々に変化していくのではないかと考えられる。1つの生徒の心に響く授業を行うことも重要だが、学習意欲を継続的に高めるためにはこうした種まきのような丁寧な指導が重要であると感じた。次に学習行動レベルと認知・感情レベルを考察する。「独立達成」が向上しなかったのは、本研究ではあくまで他者と協働的な学びを行うことが目的であり、一人で乗り越えることよりも仲間と力を合わせて課題を乗り越えようとするを意図した授業づくりを行った効果であると考えられる。また、研究実践前に平均が3点以下を示していた「自発学習」、「挑戦行動」、「独立達成」、そして「有能感」が向上した

ことは好ましい結果だといえる。研究実践前から先生が積極的に話し合いを取り入れているクラスで、無作為に「隣の人と話し合っ」「周りの人と交流してみよう」と話し合い活動を取り入れており、他の社会科系の授業と比べて生徒が生き生きしている印象を受けていたが、モデルに基づいて授業を設計し、意図をもって話し合い活動を実施することで、生徒たちの学習意欲を向上させることが出来たと考える。

また、どちらの時間も高校生にとっては聞いたことはあっても身近には感じづらいテーマを扱った。よりよい社会の実現を視野に入れた検討をどちらの授業でも実践できたと感じているが、テーマの切り口によって学習意欲への影響には差が出た。エネルギー問題では昨今の節電への呼びかけを、環境問題では有名コーヒーチェーンでの取り組みを導入に扱ったが、圧倒的に後者の方が生徒のリアクションが良かったように感じる。鹿毛(2007)は子どもたちが学習意欲をもって学習に取り組むためには、切実な気持ちをもって自ら学習に取り組む必要があると述べているが、生徒たちにとってより切実に感じられたのが2時間目の研究授業のテーマだったのだと思う。ただ、身に迫る課題であることで社会の見え方を狭める可能性もある(教員の意図で生徒が見る社会を切り取ってしまうことでその見え方が絶対だと感じたり他の考えに気付かなかったりする)ので、テーマが生徒に近ければ近いほど良いというわけではない。また、生徒たちの授業中の様子や他教科の先生の話などから現実性の有無をまず考えてしまう現在の生徒の様子を知ることができた。実際、研究授業2時間の中でどんな突拍子もない意見でも構わないと説明しても、議論する上で国や都道府県の予算や人材、技術等を挙げて現実的ではないと切り捨ててしまう場面が見られた。今回のように生徒たちから遠いテーマでは、今すぐ何かアクションを起こすための話し合いをするのではなく、将来的にこんな課題が想定されるがこれに対してどんなアプローチが考えられるのかをこれからの社会を担っていく1人として考えた上で

の話し合いをしてもらいたいと思っている。今現在は現実性がなかったとしても生徒が卒業し、社会に出ていく数年後には実現する可能性も十分あるといえる。実際B高等学校では卒業生が在学中から抱いていたクリエイティブな発想から事業を立ち上げて山梨県と提携するまで拡大することに成功した例もある。こうした話し合いを引き出すには、生徒たちからとても身近な例を取り上げて導入とし(ARCSモデルのA)、スモールステップ的に話し合いを重ねながら自分の意見を磨いていくことで(ARCSモデルのRとC)、将来自分たちが大学に入学したら、就職したら、結婚したらどうなっていてほしいのかビジョンをもっていく(ARCSモデルのS)という授業を設計するといいいのではないかと本研究で授業を実践してみて感じた。また、逆に生徒たちにとって地域課題や学校生活についてなど身近な課題を考えさせるなら、少し遠い切り口(例えば地方財源や転出・転入人口、法律と校則の関連性、制服の歴史等)からスタートしても効果があるのではないかと予想できる。なぜなら、これらのテーマは生徒たちにとって明日から使えるようなとても切迫した課題であり、勉強する意義や満足感を得やすいからである。テーマに応じてARCSモデルを活用することで学習意欲を引き出すような授業を設計できると考える。

以上より高等教育でも実践されているように高校においてもARCSモデルに基づいて構築された地理の授業において話し合い活動を取り入れることで、学習意欲は向上するということが分かった。特に学習行動レベルにおいて効果が強く、テーマ設定によってその差の大きさが異なるといえる。

本研究の課題としては、教科とクラスが限定的だったことが挙げられる。元々地歴公民科両方で活用できるような授業モデルの作成を想定していたが、授業実践を行うことが出来たのが地理の授業だけだったことで、あくまで地理の授業での検討に留まってしまった。次年度以降、地歴公民科全てを網羅できるような授業モデルの検討を深めるとするならば、公民科や歴史

科で授業を構想し、実践を行うことが必要である。また、今回は単一のクラスでのみ検討を行ったが、もし研究実施校が大規模校であれば同じ教科で他のクラス同士で比較したり、授業モデルを使う場合と使わない場合で群分けしたりすることが可能になる。より沢山のサンプルを集めることで教科の指導に活かせるような研究としていくことが求められる。より質の高い結果を得るためには、様々な条件で検討を行う必要がある。

また、本研究では前提として「学習意欲は高い方が良い」と暗にしているが、実際そうなのだろうか。ヤーキーズ・ドットソンの法則によると、動機づけはストレス等不快なものが一定量あった方が効率的であるとされている。動機づけが為されないと学習効果（パフォーマンス）は低下し、逆に為されすぎてもストレスが高くなりすぎてしまったり、アンダーマイニング効果によって学習効果が低下してしまう。課題の難易度や生徒の特性によってもストレスをどのくらいかけるのが最適なのか異なってくるため、今回は細分化せずとにかく学習意欲を向上させることを目的としたが、次年度以降研究を拡大させるとしたらクロス集計等を用いてどのくらいの量のストレスが地歴公民科の個別の学習内容に最適なのか検討を行ってみたい。

8. おわりに

今年度は、自分のこれまでの専門である教育心理学に引き付けて研究を進めていったものの、授業の構想やモデルを作成することに焦点を当てて仮説を立てていくことが多かった。通常授業を作る際、教えるべき内容（指導内容）が先にあって、どんな授業をするか考えることが多いと思われる。しかし、本研究の場合はこの逆で、どんな授業をするか考えた上でモデルに合わせて指導内容を検討した。この順で授業を構成することで、一方的で淡々とした受け身型の授業を行う可能性が低下するが、内容を教えることよりも活動が先行する可能性は上がることが予想される。活動ありきの授業となっ

てしまわないように、生徒たちにとって本当に効果のある話し合い活動なのかは慎重に検討することが重要である。また、心理学的なメカニズムから社会科（本研究では地理）の授業を考えることを試みたが、心理学的な視点から社会科を見るというよりも社会科の授業を受ける生徒の姿を見る研究となった。次年度以降は視点を生徒から生徒たちが学ぶ教科内容そのものに移して、教科内容やその指導法について研究していきたいと考えている。

9. 参考文献

- J.M.Keller 著、鈴木克明訳（2010）.『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房
- 鹿毛雅治（2007）.『子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』教育出版
- 鹿毛雅治（2013）.『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学—』金子書房
- 文部科学省（2009）. 高等学校学習指導要領解説（地理歴史編）
- 文部科学省（2021）. 新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査
- 文部科学省（2021）. 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）【総論解説】
- 内閣府（2019）. 令和元年版子供・若者白書
- 桜井茂雄（2002）. 「学習意欲」の項目。安彦忠彦・新井郁男他（編）『新版現代学校教育大事典 1』ぎょうせい
- 総務省（2021）. 令和3年版情報通信白書
- 栃木県総合教育センター（2009）. 学ぶ意欲をはぐくむ—「学習に関するアンケート」を活用して—
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所(2022). 「東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究プロジェクト「子どもの生活と学びに関する親子調査2021」結果速報 3年間で「勉強する気持ちがわからない」が半数以上に 学習意欲は低下傾向～"学習方法の理解"や"授業の楽しさ"が意欲向上のカギ～(2022年4月20日公開, 2022年10月3日閲覧)
- https://blog.benesse.ne.jp/bh/ja/news/bc/education/2022/04/20_5825.html